

都市メディア論⑦「都市と映画」（その3）

事例研究：『男はつらいよ』をめぐって ～資料編1・メイン舞台とロケ地（第1～24作）～

水野博介*

<目次>

- 1 本稿の目的
- 2 映画シリーズ『男はつらいよ』における都市および地方
 - (1) 東京
 - (2) 葛飾柴又
 - (3) 地方都市
 - (4) 都市以外の地方
- 3 映画シリーズ『男はつらいよ』第1～24作までのロケ地
- 4 分析のための覚書き
- 5 結語

1 本稿の目的

前稿では、「都市と映画」についての考察の一環として、1969（昭和44）年～1995（平成7）年まで、27年間全48作にわたって作り続けられた「寅さん映画シリーズ」こと、『男はつらいよ』（監督は大部分、山田洋次）を取り上げて、都市と映画との関係の分析を試みる」（水野博介2011年、205頁）と述べたが、実際には、分析準備の段階であった。

本稿でも引続き、映画シリーズ『男はつらいよ』を取り上げるが、現時点で「分析」は完了

しておらず、ここでは、全48作の前半の24作（公開時期は1969（昭和44）年8月～1979（昭和54）年12月の10年半）に一通り目を通した上で、既存の文献を参照し、「分析」の手がかりとなる「資料」の整理を行うことにする。その眼目は、この映画シリーズで、どのようにして個々のロケ地が選定されたのか、ということ記録や証言などを通してできるだけ明らかにすることである。

2 映画シリーズ『男はつらいよ』における都市および地方

この映画シリーズは、主人公の出身地であり、地方から戻ってきたときの拠点ともなっている場所として「東京都葛飾区柴又」が主な舞台となっている（正確に言えば、かつての松竹大船撮影所に設けられたセットの建物と実際の場所としてのロケ地の両方で撮影された）。他に、主人公が仕事をするために日本中のさまざまな地方に出かけるという設定になっているので、毎回の作品のなかでは、瞬間的に映像の断片が出てくる場所を含めて、数ヶ所は実際の地方が「ロケ地」として登場する。

なお、最近では、全国各地にフィルム・コミッションが生まれ、それが映画の撮影場所（ロケーション）の候補として地元の場所を紹介するとともに、実際の撮影においてさまざまな便宜を提供することが増えているが、今回一応の分析対象としている第1作（1969年）から第

* みずの・ひろすけ

埼玉大学教養学部教授、メディア論

24 作（1979 年）においては、そのようなことはなかったと思われる。次の映画評論家の川本三郎と山田洋次監督のインタビュー（川本 2005 年、13 頁）のなかに、そのような証言がある。

川本 ロケになる街を先に決めて、そこから物語が生まれてくるというようなことってありますか。それとも、先に物語を作ってから、街を探された。

山田 だいたい物語が先にあるんじゃないですかね。30 作半ばくらい頃かな、いろんな地方自治体の誘致が始まったのは。最初の頃は地元の協力なんか皆無でしたが。

この証言のように、全国各地からの寅さん映画誘致への動きが始まったのは、第 35 作の頃からだとすると 1985（昭和 60）頃からで、バブル経済に入ろうとする時期に重なる。

この節では、具体的にどのような場所（地域・景観等）が描かれているかを概観する。以下では、「東京」と「地方」に分け、その場所の「意味」をみておく。「東京」はさらに「東京」一般と「葛飾柴又」に分かれ、「地方」はさらに「（地方）都市」とそれ以外に分かれる。

(1) 東京

この映画シリーズでは、「東京」の「下町」である「葛飾柴又（葛飾区柴又）」に主人公「寅さん」こと「車寅次郎」の「故郷」が設定してある。

下町を舞台にすることについては、前稿で述べたように、監督の山田洋次に「何か意図的なメッセージがあるわけではない」（水野博介 2011、207 頁）のであって「この映画を見た側が、自由に解釈し、自分なりにメッセージを読み取ることができる作品」（同）になっている。

下町が舞台であることは、主人公「寅さん」の仕事が「テキヤ」であり、彼が全国各地（コミュニティ）の祭を追って、そこに設けた露店

でさまざまな商品を巧みな話術で売りさばく商売（啖呵売 [タンカヘイ]）のイメージとも合致している。主人公の出身地である「葛飾柴又」に近い浅草などでもこの商売をすることがある（第 11 作・第 12 作など）。ただし、地名が明示されているわけではない。

主な舞台は「東京」であり「下町」であるが、実際には、「葛飾柴又」およびその周辺の江戸川べりの土地に限られ、それ以外の場所が、明確な名称をともなって登場することは少ないのである。寅さんが惚れてしまうマドンナ（ヒロイン）が、東京都内の別な地域に住んでいるらしい様子も作品によっては描かれる。例えば、第 13 作「寅次郎恋やつれ」でマドンナ吉永小百合演じる「歌子」は、「青山」（であったことが後のせりふでわかる）の、とあるカフェで友人 2 人と楽しく談笑している一場面の後で実家に戻るのだが、そこは多摩川近くであり、花火が上がっているとされるシーンもあるけれど、その地名が特定されることはない（撮影はセットの建物でなされ、花火は明かりの明滅だけで映像表現されている）。

つまり、この映画シリーズでの「東京」は、ほぼ「葛飾柴又」とイコールと言ってもいいくらいなのである。「葛飾柴又」とそのごく周辺地区のみが「リアリティ」をもって描かれているのである。

(2) 葛飾柴又

主人公の寅さんは、生まれ故郷の葛飾柴又にある帝釈天の参道に面した、だんご屋「とらや」（後には「くるまや」）およびその周辺の人びと（おいちゃん・おばちゃん・妹のさくら・その夫の博・甥の満男・隣の印刷屋社長のタコ）をマドンナらに紹介する際、自分は親戚であり、そこでは居候の身分でしかないにもかかわらず、しばしば、これらの人びとを「田舎者」と称す

る。彼は、「葛飾柴又」という地名を誇りをもって、しばしば声に出して言うのだが、この地域が「東京」の周辺部にあり、あまり近代化していない地域というふうに意識しているのか、それとも「ふるさと」意識からそう言うのか、ストーリーのなかでは語られない。

しかしながら、寅さん自身の、この土地とのつながりは第1作目の冒頭のナレーションに明示されている。若いころに父親に殴られて家を飛び出し、20年もの間、帰らなかった故郷に戻り、江戸川の土手にたたずむシーンである。そのナレーションの関連箇所は、以下の通りである。

「もう一生帰らねえ覚悟でございましたものの、花の咲く頃になると決まって思い出すのは、故郷のこと、ガキの時分ハナツレ仲間を相手に暴れ回った水元公園や江戸川の土堤や帝釈様の境内のことでございます。」(松竹2005年、10頁)

寅さんにとっては、葛飾柴又という土地は、まさにかげがえのない「ふるさと」であり、少なくとも、そこは気取った「都会」ではないことがわかる。その点が、多くの観客の共感を得る基盤となっているのであろう。

この映画シリーズを作った松竹株式会社の『男はつらいよ パーフェクト・ガイド』(2005年)によれば、「葛飾柴又」とは次のような場所である。

「柴又は、経栄山題経寺(柴又帝釈天)の門前町として栄えたところ。ひっそりした風情の参道には懐かしい雰囲気の店々が並び、ちょっと歩けば江戸川が見えてくる。矢切の渡し、水元公園など、心が和む風景にめぐり逢える町だ。映画「男はつらいよ」は、ここを舞台に48本作られた。葛飾柴又は、車寅次郎の故郷でもあるが、実は、日本人が忘れ去って久しい<こころ>を思い出させる、日本人そのものの故郷でもあるのだ。」(同書、8頁)

「葛飾柴又」は「日本人の心のふるさと」だ

という位置づけである。この土地を映画のメイン舞台に設定した山田洋次監督が、川本三郎監修の『寅さん完全最終本』(2005年)で、この土地に対する第一印象を語っている。葛飾区高砂(この地名は、作品のなかにも時々出てくる)にある作家早乙女勝元の家に行って昼ご飯のために、初めて帝釈天の門前町で「茶飯」というものを食べ、その門前町の“寂しさ”と食べ物の“淡泊さ”に驚いたようであった。引用が長くなるが、その続きは以下の通りである。

「[山田洋次の発言の途中から]

それが柴又の第一印象。ネーミングも面白い。シバマタという、ちょっと田舎風な発音もね。赤坂とか麻布とかはニュアンスが違う。上野や浅草とも違って、葛飾・柴又というのは東京の中でもローカリティに溢れた名前だなと思いました。戦災に遭ってないのもよかったです。東京の下町はみんな焼きましたからね、米軍の空爆で。

川本 柴又は焼けてない?

山田 焼けてないのは、あの辺だけ。昭和の初期くらいの面影がいまでも残っています。駅から帝釈天に行く参道がゆったりカーブしている。田んぼの間の農道がそのまま道になっているんですね。浅草仲見世通りのようなシンメトリカルな都会的な風景とは違って、風情有りました。軒の低い平家[屋]の店が並んでいて、その低い軒の向こうにお寺の山門が半分くらい見えるのもよかったです。今は看板が増え、ビルも建って、山門は見えなくなっちゃったけど。

寅さんの故郷を決める時に「浅草ではないし、深川でも、富岡八幡でもない。そうだ柴又があったな」ということで、あそこにしたんですね。

川本 それこそ深川とか日本橋の人形町とか浅草とか、本来の下町の人に言わせると「柴又は下町じゃなくて、近所田舎だから」って言い方しますね。

山田 銀座や上野に行くのを、柴又の古い人は「東京に行く」って言ってました。東京だと思っていないんです。」

(川本同書、5-6頁)

要するに、山田洋次監督が、葛飾柴又を寅さん映画シリーズのメイン舞台に選んだ理由は、東京のなかでも、伝統的には「下町」でさえなかった土地だったということと、その田舎っぽさを体現するような地名や古い街並みに惹かれたと言えよう。それらが、寅さんのイメージにも合致していると判断されたのであろう。

ちなみに、この映画シリーズでは、第2作から第5作、第9～37作、第39・43・45作の冒頭に、寅さんが見る「夢」のシーンが描かれている（松竹前掲書、96～100頁）が、そこではしばしば「葛飾柴又」が昔（江戸時代あるいは明治～大正期）の「柴又村」として描かれている。柴又が「村」でなくなったのは、遅くとも「葛飾区」のできた1932（昭和7）年であろう（参照：川本前掲書、6頁）。

この「夢」のシーンは、実は寅さんが旅先のいろいろな場所で、ちょっとうたたねをしたときに見ているという設定である。これについて、松竹のガイドでは以下のようにコメントしている。

「旅先から故郷・柴又を思う寅さんの切々たる心情も伝わってくる導入部だ。」（同書、30頁）

この導入部に続いて、寅さんが故郷の「とらや」に帰ってきて、ストーリーの展開が始まるのである。この「とらや」は、実際の撮影においては重要である。というのは、「上映1時間40分程度の半分以上がとらや周辺の場面」（報知1987年、127頁）であるからだ。

なお、だんご屋「とらや」の設定は、「江戸時代から続く老舗」であり、寅さんの叔父にあたる車竜造は、その6代目にあたる（松竹前掲書、41頁）。この「とらや」のモデルとなった店は「監督の山田洋次と当時の梅田美術監督（現松竹映像事業部）が柴又にロケハンして見つけた「亀屋」というだんご屋」（報知前掲書、115頁）で、山田監督によれば「店から土間が通って裏

まで通じる。関西の商家によくあった奥行きのある長い作りが非常にいい感じだった。それが、第1作ができて2年ほどで鉄筋のビルになっちゃって。今は面影もないですよ」（同）という。

しかし、この映画シリーズは、「東京」をビルの林立する“近代的”な都会としては決して描いていないのである。

(3) 地方都市

寅さんは、第一作では奈良・京都に出かけ、第2作でも京都に出かけるが、これらは私的な用事のためだったと思われる。奈良は観光をしているようであるし、2回目の京都では自分の生みの母親＝ミヤコ蝶々を探し出して会うのである。テキヤという商売柄から、仕事のために地方に出かける場合には、祭りが開かれている場所（コミュニティ）に行くことが多いので、奈良や京都のような、地方の中心的な都市に行くことは、その後の作品では珍しくなる。

このことに関連して、川本三郎と山田洋次監督が次のように語っている。

「[川本三郎の発言の途中から]

[寅さんが] いわゆる田舎を旅するようになったのは、3作目『フーテンの寅』昭和45年）の新珠三千代が旅館の女将をしている湯ノ山温泉でしたか、三重県の。あの頃からですか。

山田 そうね、あの頃かな、どこでロケーションするかが作品のポイントになったのは。

川本 地方はお金がかかるから、映画がヒットしたおかげで、地方ロケが可能になったということがあるんですか。

山田 それもあります。監督になりたての頃「新人監督のロケは撮影所から半径100m以内」なんて言われましたから。でも地方の珍しい風景、いい風景を観るのは映画の喜びでもあったわけです。第1作、第2作は京都でした。あの頃はまだ地方の旅先って感じじゃなかった。」（川本前掲書、7-8頁）

第 14 作では、ロケ先が「九州唐津」という字幕で紹介されており、当地の祭りの映像もあるのだが、このように地名が明示されることは例外的なことで、第 13 作まではなかったし、第 15 作以降でもまたなくなった。

第 13 作では、ロケ地の「津和野」という地名が、そこから葛飾柴又に戻ってきた寅さんの口から一度だけ言われるのであるが、その前の津和野での現地のシーンでは、それがきちんと示されていない。古い街並みの映像や堀に錦鯉が泳いでいる映像は、まさに「津和野」のものであるのだが、寅さんが歌子と別れるバス停の縦書きの文字も、上の「津」の字が見えず、「和野」だけしか映像としては示されていないのである。

津和野の例にあるように、地方の「都市」がロケ地となる場合には、近代的な中心都市よりも、古い街並みが残る都市が選ばれている傾向が圧倒的に大きい印象がある。その方が映画的に“絵”になるからかもしれないし、寅さんの商売ができるような「祭り」が行われることが必要だから、必然的にそのような街が選ばれるのかもしれないし、あるいは、山田洋次監督の好きな良き日本を彷彿とさせるノスタルジックな景色の故なのかもしれない。

例えば、第 17 作「寅次郎夕焼け小焼け」では、兵庫県龍野市（現たつの市）がロケ地に選ばれ、当市の「清江橋」「本町 梅玉旅館」「山崎街道～揖保川～龍野公園」「龍野橋」「鶏籠山 [ケイウザン]」「上霞城 武家屋敷跡」が映し出されている（男はつらいよ松竹公式サイト）。いずれも、古き良き日本の、“絵”になる風景と言える。

「地方都市」も「東京」と同様に、ここでの映画シリーズでは、決して“近代的”な都会としては描いていないのである。

(4) 都市以外の地方

この寅さん映画によく出てくる地方の「風景」

として印象に残るものは、第 1～24 作の範囲で言えば、一つには、山に見える田園や道（舗装されていないような）、それに“祭り”が催されている神社仏閣といったものである。それらは、特にどこと特定される必要もないような、全国のどこにでもあるような、平凡な「風景」である。

もう一つは、うらぶれた感じの和風旅館のある「温泉地」である。これらの温泉地は、ちゃんとした「地名」がある。寅さんはそこで、何か「番頭」をしていたり、番頭ではなくても「電話番」をしたりすることがある。

三つ目は、頻繁に出てくる「海」あるいは「川」や「湖」といった場所である（当然、それに伴い「栈橋」や大小の「船」も頻出する）。そのような場所は、旅をする寅さんにとっては、ある土地への「到着口」であり、そこからの「出発口」でもある。

最後に、鉄道および蒸気機関車が頻出する。これらはまさに、寅さんのする「旅」の“象徴”であろう。

3 『男はつらいよ』第 1～24 作までのロケ地

寅さん映画シリーズ『男はつらいよ』（全 48 作）の「ロケ地」がどこであったかは、すでにいくつもの文献に記されている（例えば、川本前掲書や報知新聞特別取材班編前掲書さらには西川幸夫の著書）。ここでは、それらの文献に分散して記されている情報をもとに、ロケ地情報を整理してリストアップする。それぞれ個別に、その土地の特徴に関する文献に記されているコメントに加えて、この小論の筆者のコメントも付すことにする（特に誰と記していない感想がそれである）。

なお、特に最初の数作については、当時、ロケがそれほど重視されていなかったため、具体的な地名も明確でなく、コメントも少ないもの

がある。

第1作『男はつらいよ』

ロケ地：京都，奈良

「御前様のお嬢さん（光本幸子）に相手にもされず、柴又の町のもの笑いになった寅は、逃げるように旅に出る。失恋，そして旅立ちのパーティーの始まり。

弟の登（津坂匡章）と夜の上野駅に行く。おそらく夜行列車で北へと向かうのだろう。東京駅から新幹線に乗るのではなく，上野駅から夜汽車に乗る。庶民派の寅らしい」（川本同書，70頁）。

登に青森行き切符を渡して故郷に帰るように言い、「そして上野駅の地下食堂街の大衆食堂でひとりラーメンをすすする」（同）。

第2作『続・男はつらいよ』

ロケ地：京都，三重県柘植

「寅さんの恩師，坪内先生〔東野英治郎〕と娘の夏子〔佐藤オリエ〕が，京都の旅行中に訪れる清水寺」（西川2003年，11頁）

第3作『男はつらいよ・フーテンの寅』

ロケ地：三重県四日市・湯ノ山温泉，種子島

「湯の山温泉は，三方を鈴鹿連峰に囲まれた山間の温泉町。町を貫く三滝川は，蒼龍〔アヲヲ〕，大石公園など変化に富んだ溪谷美を織りなしている。」（西川同書，13頁）

第4作『新・男はつらいよ』

（1970＝昭和45年）

ロケ地：葛飾柴又

「梅の花がほころび始めた頃。寅は信州あたりの山里（ロケは山梨県の道志村）を歩く。バスを待つあいだ停留所の前にある，小さな峠の茶屋に入る。孫を背負ったお婆さんが客の相手

をしている」（川本前掲書，71頁）。

〔以下の記述では、『男はつらいよ』のメインタイトル部分は省略し，「」内にサブタイトルのみを記す〕

第5作「望郷篇」（1970＝昭和45年）

ロケ地：千葉県浦安，北海道札幌・小樽

「撮影されたのは小樽港に近い小樽築港機関区。蒸気機関車だけでなくターンテーブル（転車台）もとらえられていて貴重な映像資料になっている。」「映画に登場する駅は函館本線の銀山駅と小沢〔コザリ〕駅。」（川本同書，41頁）

この作品では，鉄道が中心に描かれている。

第6作「純情篇」（1971＝昭和46年）

ロケ地：長崎県五島列島福江島

「〔ロケ当時の〕福江港は，まだ離島という，うらぶれた感じがあったが，現在はもう地方の小都市。大きな建物も多い。寅が来た頃は，長崎から船で三時間半もかかったが，現在では高速フェリーで一時間。ただこの島でも過疎化が進んでいて最盛期に15万人あった人口がいまでは4万人という」（川本同書，56頁）。“都市化”と“過疎化”が同時に進んでいるわけだ。

第7作「奮闘篇」（1971＝昭和46年）

ロケ地：新潟県・越後広瀬，沼津，青森県鮭ヶ沢

ここでのロケは，映画の冒頭のシーン（この作品には「夢」のシーンはない）で，「只見線の越後広瀬駅（新潟県）で実際の子供たちと撮影している」（川本同書，72頁）。そこには「雪深い里の越後広瀬駅の小さな駅舎」（同）があり，「情にもろい寅は，集団就職の子供たちを励ます」（同）様子が撮られている。

「待合室には，当時の国鉄の旅行キャンペーン，「ディスカバリー・ジャパン」のポスターが張ってある」（同）。

第8作「寅次郎恋歌」(1971=昭和46年)

ロケ地：岡山県備中高梁 [カハツ]

冒頭、旅芝居一座が「港近くの漁業会館で興行中」(川本同書、73頁)だが、折からの雨で客足が悪く休演とする話がある。この設定は「四国あたりの漁師町」(同)となっているが、実際の「ロケは神奈川県の三崎」(同)だという。また、「ラスト、信州あたりの山里(ロケは山梨県の甲斐大泉)」(同)というふうに、この頃のロケは、風景の“雰囲気”重視で、具体的な地名や名所を重要視していなかったようだ。

第9作「柴又慕情」(1972=昭和47年)

ロケ地：静岡、金沢、福井県東尋坊・京福電鉄京善駅・東古市駅

ここでは、寅さん映画シリーズの初期の作品としては珍しく、「東尋坊」という名所が登場している。これについて川本は「この映画が作られた当時、国鉄が「ディスカバー・ジャパン」のキャンペーンを始め、女性誌「アンアン」や「ノンノ」の若い女性読者が日本各地を観光旅行するようになった。[マドンナ吉永小百合が演じる若いOLの]歌子もそんな「アンノン族」のようだ」とコメントしている(川本同書、74頁)。

しかし、「[歌子ら]三人娘との観光旅行を終え、夜、寅は東京に帰る彼女たちを小さな駅で見送る。新幹線の駅ではなく、ローカル線の駅である」(同)。「京福電車の東古市駅(永平寺に近い)で撮影されている」(同)とある。福井-金沢間は、本稿を書いている時点でも、新幹線が開通していない路線であるが、当時もちろん、寅さんに似合うローカルな雰囲気があったのだろう。

第10作「寅次郎夢枕」(1972=昭和47年)

ロケ地：山梨県・明野村周辺

昔、この地で「行き倒れとなった渡世人」

(川本同書、75頁)をとむらったという話を旧家の老婦人(田中絹代が演じた)に聞いたあと、「老婦人に「お線香をあげていただけますか」といわれ、寅と一緒に墓参りをする。ススキの見える原に墓標がぼつんと建っている。秋の夕暮れ、寅はうなだれて手を合わせる。股旅物を思わせるような静かな名場面。甲州の明野村という山里で撮影されている」(同)。ここでも、風景の“雰囲気”重視である。

第11作「寅次郎忘れな草」(1973=昭和48年)

ロケ地：北海道・網走

寅さんは、列車で「網走駅」に着き、「網走神社」が見える商店街(名は明示されていない)で早速、商売をする。「網走川の河口は漁港[網走港]になっていて近海[オホーツク海]で漁をする小型漁船が出入りする」(川本同書、26頁)。他に、「網走橋」が河口近くにかかっており、そばに「造船所」がある(以上、川本同書、27頁)。

ここで撮影されているのは、北海道の“大自然”というものではなく、むしろ人間活動と関わりのある自然の一部である。この作品では、寅さんが珍しく「牧場」で“労働”をして疲れ果てるというシーンもある。

第12作「私の寅さん」(1973=昭和48年)

ロケ地：熊本県天草・阿蘇、大分県別府市

「やまなみハイウェイのレストハウスから、阿蘇山の噴煙を望む」(川本同書、94頁)。「山頂の阿蘇不動尊の祠[ホウ]のそばに[タンカバイの]店を張る」(同)。

第13作「寅次郎恋やつれ」(1974=昭和49年)

ロケ地：島根県津和野・温泉津 [ユツ]

「津和野」については、すでに「地方都市」のなかで説明した。「温泉津」は、「島根県の日

本海に面した人口四千人ほどの小さな町。歓楽温泉地というより、昔ながらの静かな湯治場の雰囲気を残している」（川本同書、76頁）。

その土地の女性と所帯を持ちたいと言う寅さんと一緒に、さくらとタコ社長がこの地に来る。結局、寅さんの結婚話は露と消える。その後にある場面について「山陰本線の温泉津駅で列車を待つ。この場面がいい」（同）という。「夏の朝。周囲に高い建物ひとつない田舎の駅の島式ホーム。駅の隣に小学校がありブラスバンドが「旧友」を演奏している。それをさくらがじっと見る」（同）。「蒸気機関車がまだ走っている」（同）。

このような「田舎の駅のホーム」は寅さんが作品の冒頭で見る「夢」にもしばしば登場する（正確に言えば、「夢」から覚めるとそのホームにいる、という形での登場である）。

第14作「寅次郎子守唄」（1974＝昭和49年）

ロケ地：群馬県碓氷温泉，信州，佐賀県唐津・呼子 [ヨブコ] 港

「玄界灘に向かった，佐賀県の海辺の城下町，唐津で，寅は秋の大祭，唐津おくんちに出かけ，商売に励む」（川本同書，77頁）。先にも述べた九州唐津の祭り「唐津おくんち」は，珍しく“観光客用のイベント”であるが，映像として示されている。

「そのあと，西の漁師町，呼子にまで足を延ばす。唐津の十分の一くらいの人口しかない小さな町。大きな唐津にはではなく，小さな呼子に泊まるのが寅らしい。旅慣れている。

呼子の港には渡し舟がある。」（同）

第15作「寅次郎相合い傘」（1975＝昭和50年）

ロケ地：北海道・小樽

「小樽に着いた三人〔寅さん・歌手リリー（浅丘ルリ子）・サラリーマン（船越英二）〕は，運河沿いの通りを歩く。」「早い時期に，運河のあ

る小樽の町の美しさをとらえている貴重な作品」（同書，38頁）「当時は現在のように運河が観光名所になっていないので，橋からの眺めは決してよくない。錆びた屋根の倉庫がうらぶれた感じで並んでいる。」（同書，38-39頁）

“有名”な場所を撮影しようとしたのではなく，30年前の恋人を探しに来たサラリーマンの「心象風景」を反映させたものだと言えよう。

第16作「葛飾立志篇」（1975＝昭和50年）

ロケ地：山形県寒河江市

ロケハンチーフの助監督であった五十嵐敬司さんの思い出である。「山形の寒河江でロケハンしている途中に，最上川に浮かぶ渡し舟を偶然見つけたんです。尋ねると間もなく無くなるという。山田監督は“無くなるものを惜しむ人”ですから，話をするとすぐシナリオに書き加えての撮影となりました」（川本同書，95頁）。

「その頃，最上川には他に2か所も渡し舟を見ることが出来た。撮影したのは大江町深沢の渡し。鐘を鳴らして舟を呼ぶ風情もよかった」（同）。

第17作「寅次郎夕焼け小焼け」

（1976＝昭和51年）

ロケ地：兵庫県龍野市

「龍野市」については，すでに「地方都市」のなかで取り上げた。

「なぜ龍野がロケ地に選ばれたのか。＜中略＞知人が龍野にいることを思い出し，電話をした。龍野はどんな町かと聞かれ，知人はとっさに返事をした。「寺と芸者の多い町」。その頃はもう町に芸者はいなかったのだが，龍野といえば「寺と芸者」といわれていた。

知人の言葉に興味を覚えた山田監督はその足で龍野を訪れ，小京都のたたずまいが気に入り，ロケ地に決めたという」（川本同書，44頁）。

「米どころ播州龍野の郊外には水田が広がる。この界限には、日本の懐しい原風景が今も残っている」(同)。

「町中を悠然と流れる揖保川。アユなども遡上してくる清流で、古くからの醤油作りにも欠かせない。奥にそびえるのは龍野のシンボル・鶏籠山」
「町中には、白い土壁に瓦屋根などの武家屋敷も多く残る。昔ながらの狭い道そのまま」(川本同書、45頁)。

第18作「寅次郎純情詩集」(1976=昭和51年)

ロケ地：長野県別所温泉，新潟県六日町

五十嵐助監督の思い出。「山田監督から山の中の可愛い分校はないかと聞かれ、閃いたのが毎冬のスキーで行く新潟県・六日町にある山奥の分校。撮影には児童にも出演してもらいスキーのシーンを撮った」(川本同書、94頁)。

「雪の山々を背にした小さな分校で、新任教師の雅子〔檀ふみ〕が児童と走りまわる。陽ざしを浴びて輝く谷川連峰」(同)。

第19作「寅次郎と殿様」(1977=昭和52年)

ロケ地：愛媛県松山市・大洲〔材ヅ〕市・予讃本線下灘駅

この映画シリーズでは「瀬戸内の島を別にする」と四国を舞台にしたものが意外と少なく(川本同書、78頁)唯一のもの。

「寅が愛媛県の城下町(加藤氏六万石)、大洲を旅する。予讃本線の伊予大洲駅で降り、鶴飼で知られる肱川を渡ると、小京都と呼ばれる古い町並みが広がる。

町の中心に、元弘元年(1331)に作られた大洲城がある(国の重要文化財)。寅は、この城跡でひと休みしている時に、時代劇の殿様のような話し方をする立派な老人(嵐寛寿郎)に会う。あとで大洲藩十六代当主と分かる。

実際、大洲の古い町並みを見るとこんな殿様

が現れても不思議ではない。ここはまたNHKテレビの人気ドラマ「おはなはん」の舞台にもなった」(同)。

「冒頭、寅が列車に乗る海辺の駅、目の前が海なので鉄道ファンに人気がある予讃本線、下灘駅の風景もいい」(同)。

ここでは、「古い町並み」と、それにふさわしい、従って観客の期待を裏切らないような「登場人物」との組合せが意図されている。

第20作「寅次郎頑張れ！」(1977=昭和52年)

ロケ地：長崎県平戸

「この映画が作られた1977年に九州本土と平戸島を結ぶ平戸大橋が作られたが、寅は昔ながらに船で平戸港に入る。

小さな湾を抱くようにある小高い山の上に平戸城が見える。船が着く棧橋近くは商店が何軒も並んでいる。平戸島の中心地である。」(川本同書、79頁)

「〔藤村志保が演じる〕藤子というその〔失恋した若者=中村雅俊の〕姉は港近くの商店街でみやげもの屋をやっている。「おたち」という実際にある店が撮影に使われている。松浦史料博物館の石段の下あたり。

寅は藤子の案内で、聖フランシスコ・ザビエル記念聖堂やオランダ塀などの名所を歩く」(同)。この作品では、「平戸城」や「オランダ塀」などの“名所巡り”が盛り込まれているが、やはり「ディスカバー・ジャパン」の流れを受けているのであろう。

第21作「寅次郎わが道をゆく」

(1978=昭和53年)

ロケ地：熊本県阿蘇，田の原温泉

五十嵐助監督の思い出。「すぐ近くには、露天風呂めぐりで全国的に有名な黒川温泉や、弘法大師も旅の疲れを癒した古くから続く杖立〔江

好] 温泉など、人気の温泉が多いのですが、寅さんが泊まるのは、小さな川沿いにひっそりとある田ノ原 [タノハ] 温泉。今でも変わらない、鄙びた、もの寂しい佇まいが、寅さんにはピッタリの温泉でした。撮影当時から宿は3軒しかなく、寅さんが泊まった「大朗 [タイロウ] 館」の玄関には、当時の写真などが今も飾られているそうです。川辺には寅さんがお気に入りだった共同浴場も残っています」(同)。

第22作「噂の寅次郎」(1978=昭和53年)

ロケ地：長野県・山梨県、静岡県・大井川・蓬莱橋

「静岡県の山間部と、海のない山梨県と長野を旅する。港好きの寅が山あいの町を歩くのは珍しい」(川本同書、80頁)。「田舎町を流れる大きな川に木橋が架かっている。いまだき木橋とは珍しい」(同)。「大井川の井川ダムで、失恋したらしい若い女性(泉ピン子)に会い、近くの食堂で失恋話を聞く」(同)。

「大井川沿いの小さな町に泊まって、次の日の朝、バス停で寅はその女性と別れる。バス停に「千頭 [セズ] 駅前」とある。千頭は大井川鉄道の駅。『男はつらいよ』では、バス停も重要な別れの場所になる」(同)。

「蒸気機関車がホームにはいってくるこの[写真の]場面は大井川鉄道の塩郷 [エンゴリ] で撮影された」(同)。

「車内で偶然、泉ピン子演じる失恋の女性に会う。無事、いい男を見つけ新婚旅行に行くところ。行先が身延線沿線の赤石温泉というひなびた秘湯なのがいい」(同)。

第23作「翔んでる寅次郎」(1979=昭和54年)

ロケ地：北海道・支笏湖周辺

「虎杖浜の海岸(北海道白老郡白老町)近くの小高い山の上にロケ地があり、寅さんがパイ

をする神社が建っていた。」(西川前掲書 57頁)

第24作「寅次郎春の夢」(1979=昭和54年)

ロケ地：和歌山、京都・西陣、江戸川上空

これも五十嵐助監督の思い出。「機内のシーンは日航の訓練室を借りて撮影し、江戸川を上空から眺めるシーンはセスナに乗っての撮影」(川本前掲書、97頁)。

4 分析のための覚書き

寅さん映画シリーズの社会学的研究を目指した濱口・金児(2005年)の文献では、「地域性」についての検討は十分されていない。本稿の資料は、寅さん映画シリーズにおける「地方」の描き方の「バラエティ」を示しているが、今後の分析では、前稿にも示した9種類の「都市のシンボル」(水野博介、2009年)という側面から、以下のような項目に関する「内容分析」を行おうと考える。これらの諸要素は、映画に描かれた「地方」の「イメージ」と関わっている。

① 「田舎」と「都会」の出現頻度

この点については、見る側の主観が大きく左右する可能性があるため、映像あるいは資料から客観的な手掛りを見つける必要がある。

② 「祭り・イベント」の出現頻度

③ 古い都市の「古い町並み」[景観]の有無

どの程度“古い”ものかはさまざまであろう。しばしば出てくる「蒸気機関車」もその一部として捉えるべきであろう。

「小京都」がいくつかの作品に出てくることも注目すべきだろう。

④ 有名な「ランドマーク」か否か

⑤ 「有名人」への言及

誰でも知っている、その土地の有名人か、

第 19 作の「寅次郎と殿様」がその例になるが、その「地方の名士」のような人も含めうる。

⑥ 過去の映画やドラマ等のロケ地となった場所

ここでも、第 19 作の「寅次郎と殿様」がその例になるが、NHK の連続テレビ小説『おはなはん』ですでに描かれている、ということ踏まえて、新たな作品が作られたのであろう。

5 結語

このような「資料」を作ってみると、この寅さんシリーズの映画では、その「時代の反映」となっているような「流行」や「変化」を捉えている面もある（ディスカバー・ジャパンなど）が、それよりも、時代によって「変わらない」、あるいは、むしろ「変化してほしくない」もの（特に景観や蒸気機関車のようなもの）が重点的に選ばれて撮影されているように思われる。

<文 献>

水野博介「都市メディア論⑥『都市と映画』（その 2）事例研究：『男はつらいよ』をめぐって（分析準備編）」『埼玉大学紀要 教養学部』第 47 巻第 1 号、205-213 頁、2011 年

川本三郎監修『寅さん完全最終本』小学館、2005 年

松竹株式会社映像版權室他編『教養・文化シリーズ 男はつらいよ パーフェクト・ガイド 寅次郎 全部見せます』日本放送出版協会、2005 年

報知新聞特別取材班編・松竹株式会社寅さんファンクラブ『ドキュメント・男はつらいよ 寅さん映画の仕事師たち』一光社、1987 年

西川幸夫『「男はつらいよ」水彩スケッチ 寅さんが旅した風景』日貿出版社、2003 年

濱口恵俊・金児暁嗣編著『寅さんと日本人 映画「男はつらいよ」の社会心理』知泉書館、2005 年

水野博介「都市メディア論③都市のシンボルとイメージ」『埼玉大学紀要 教養学部』第 45 巻第 2 号、219-226 頁、2009 年

< HP >

男はつらいよ松竹公式サイト

www.tora-san.jp/toranomaki/movie17/story.html

<謝 辞>

この研究では、平成23年度 埼玉大学「総合研究機構プロジェクト研究費」（プロジェクト名：「日本の映像作品（映画およびテレビドラマ）に見る都市化・高齢化の描写とその影響に関する研究、研究代表者：水野博介）によって購入が可能になったDVD作品の一部を利用した。記して謝意を表す。